女帝壊胎

……ユーハリシュ帝国の成り立ちは神話と伝説の時代まで遡る。その成り立ちは定かではないのだが、かつてこの世は邪神と魔王によって支配され、人々は異形のバケモノたちに虐げられる暗黒の時代を送っていた。その時代は一千年の永きに渡って続き、数え切れないほどの人間が生まれ落ちたその瞬間から首に隷属の枷を嵌められ、目に見えない従属の鎖に繋がれるという人生を送っていたのだが、そのような時代もやがて終わりを迎えることとなる。

後に「解放帝」と称されることになるユーハリシュという若者がいた。彼の父親は、バケモノたちに生きたまま身体を引き裂かれて殺され、母親と妹は犯されながら殺されて、息絶えてもなおも死姦され続けた。彼自身もまた、バケモノたちによって弄ばれて、片方の眼球を自らの手で抉ることを強要された。

ユーハリシュはバケモノたちが憎かった。彼らの支配者である邪神と魔王も憎かった。その憎しみが限界点を突破した時、ユーハリシュは全身に怒りをたぎらせて、剣を取って立ち上がった。

だが当初、ユーハリシュに賛同する者はいなかった。皆無だった。いまの支配制度が当然だと思っていたから

でもあるが、それ以上に、皆、バケモノたちが怖かったからだ。逆らえば――歯向かえばどんな残虐な方法で殺されるかわかっていたからである。生きながら全身の皮を剥がされ、腹を裂かれて内臓を引きずりだされて、意識がある状態で喰われながら殺されるのである。そしてバケモノたちはそれを平然とおこなうのである。怖くないわけがなかった。

それはユーハリシュも同じだった。彼もまた、バケモノたちが怖かった。その支配者である邪神と魔王も恐ろしかった。だが、それ以上に、憎しみが勝った。決して正義のためなどではなく、血の涙が流れるほどの憎しみが、彼の心を完全に支配していたのだ。そしてその憎しみが力となって彼を強くした。

ユーハリシュは戦った。戦いに戦って、戦い抜いた。バケモノを一匹殺すつど、その断末魔の叫び声を耳にするつど、彼は強さを増していった。傷つきながら、おびただしい量の血を流しながら、乾いた叫びを発しながら、彼は戦いに戦って勝ち続けた。そして戦いの勝利を続けるつど、彼の周りには次第に味方が増えていき、賛同者や支援者が多く集まってきて、その勢力はついに一大勢力となって世界を覆った。そして、ついにその時が来たのである。

後の世に伝わる「追放の地での最終決戦」にて、ユーハリシュ率いる数百万の軍勢は、邪神・魔王率いる数十

万体のバケモノの軍勢と対峙した。この種の存亡をかけた戦いは、三日三晩の長きに渡って続いた。それは総力戦だった。

長く激しい戦いの末、ユーハリシュはついに邪神と魔王を打ち倒した。そして、それからさらに長い時間をかけて、地上に蔓延るバケモノたちを、最後の一匹にいたるまで駆逐したのである。こうして世界は暗黒の時代から解放されて人の時代が訪れた。

世界を解放したユーハリシュは「解放帝」と称されて帝位に就き、世界を統べる支配者として世界の頂に君臨した。

だが、彼の御代はわずかであった。長い間、激しい戦いの世界に身を置いてきたユーハリシュの身体はすでにボロボロで、世界皇帝となってからわずか一ヶ月後、彼は倒れてしまい、そのまま還らぬ人となってしまったのである。

ユーハリシュという巨大な支えを失った世界は乱れた。長きに渡って抑圧下にあった人々は、本能の中に封じられていた欲望という力を爆発させて、自らが次なる支配者となるべく争ったのだ。その世界的な闘争は数世代の長きに渡って続き、それがようやく収まった時、世界の版図には幾つかの国が誕生していた。その中に、ユーハリシュの直系によって建国された「ユーハリシュ」という国もあった。

国家ユーハリシュは、最初は小さな国でしかなかったが、建国後、ゆっくりと領土を拡大させていき、公国から王国へ、王国から帝国へと国の形を変貌させていき、現在では世界でも有数の大国として君臨するようになった。だが、その過程で生じた大小様々な争いによって、ユーハリシュの血を引く者は次第に少なくなっていき、ついには独りだけになってしまう。その者の名は、エカテリーナと言った。

帝国暦三七五年七月、先帝の死去に伴い、ユーハリシュ帝国の新皇帝に即位した女帝エカテリーナ一世は、聡明で、勇敢で、とてつもなく美しい女性であったと年代記には記されている。

その顔立ちは、まるで古代の女神像を彷彿とさせるような美貌に満ちており、手足は細くしなやかで、豪奢な髪の毛は一本いっぽんがまるで金糸のように美しく、肌は白磁か象牙細工を彷彿とさせる白さを誇っており、瞳は大粒のサファイアのような大きさと色をしていたという。彼女に関する肖像画は何十枚と残されており、その画を見た者は、彼女の美しさに思わず息を飲むと言われているが、実際の女帝を目にした者は、画よりも遥かに美しかったと証言している。

エカテリーナ一世は、ユーハリシュ帝国の名門・ラブラス家の血も引く女性である。ラブラス家は代々、美貌の持ち主を嫁や婿として迎え入れてきた一族だ。そのた

め、同家は度々「絶世」と称される美男・美女を輩出しており、彼らを帝室に送り込むことによって帝国での繁栄を享受してきた。ゆえに、ラブラス家の血を引くエカテリーナが戴冠した時、ラブラス家は我が世の春が訪れたと狂喜したと伝えられている。女帝エカテリーナはこの時、わずか一七歳。ラブラス家が若い彼女を裏から操ろうとしていたことは明白であった。

しかし、ラブラス家の思惑とは裏腹に、聡明であったエカテリーナは彼らの影響力を意図的に排して国家の運営に邁進した。血の繋がりが国家先見の明を曇らせることを承知していた彼女は、縁故の繋がりではなく、才能や能力を重視した人材を積極的に登用することによってラブラス家に付け入る隙を与えなかったのだ。

即位後、エカテリーナは様々な改革や規制緩和に乗り出して帝国を繁栄に導いた。金山や銀山の開発に積極的に投資をおこなって国家財源を確保する一方、国民に対しては減税政策を実施して経済の活性化を図った。宮廷費を削減し、役人が賄賂を受け取ることを法律で禁止し、免税特権を廃止して貴族や僧侶たちからも税を徴収するよう規則を改めた。教育水準を底上げするため、各地に学校を建設し、返済不要の奨学金制度を設け、多産を奨励すると同時に、新生児が生まれた家庭には多額の給付金を支給したりもした。金は巡れば必ず自らの元に返ってくることを承知していたエカテリーナは、国庫を解放

して国民のために積極的に金を使った。

だが、彼女が実施した政策の中でもっとも高い評価を得た政策は、隣国の邪教国家・バールミリアムの討伐であった。

バールミリアムは邪悪な宗教国家である。一説によれば、滅びた魔王の血族によって建国されたといわれているこの国は、人口が一〇万人にも満たない小国で、主な産業はない。いまは滅びた邪神を崇拝するダエーワという教団によって国全体が支配されており、国民は搾取の対象として奴隷のような生活を一世紀以上もの間強いられていた。

この国には現在でも生け贄という血生臭い風習が残されている。ダエーワ教団が崇拝する邪神に対する儀式であり、毎年数百人単位で人間が供物として捧げられているのだが、実はその多くがバールミリアム周辺国から拉致されてきた他国民たちであった。

生け贄の儀式は残虐を極める。生きた人間の胸を裂き、心臓を手で掴んで取り出すと、それをまだ血管が繋がっている状態で握り潰すのである。生け贄とされた人間はその光景を目の当たりにして恐怖と絶望の悲鳴を発することになるのだが、この際に発する「苦しみ」こそがダエーワ教団が崇拝する邪神の最高の供物となるのだった。

自国民が拉致され、残酷な生け贄の犠牲となっていると知って、バールミリアムの周辺国はこれまでに幾度と

なく軍隊を派遣してこの邪悪な国家を滅ぼさんとした。しかし、バールミリアムは、黒魔術に長けた軍隊を保有しており、この存在があまりにも強力であったため、討伐は幾度となく失敗に終わっていた。

だがエカテリーナは、大軍を編成し、これを自ら指揮してバールミリアムに攻め込むと、最前線にたって兵士たちを鼓舞すると、自らも剣を振るって戦い、多くの犠牲者を出しながらも、ルト荒野の決戦でバールミリアムの魔術軍団を壊滅させることに成功したのだった。そして、古城ベダにてダエーワ教団の指導者であるジュブラと対峙すると、これを討ち取ることに成功した。

エカテリーナに剣を突きつけられた時、ジュブラは抵抗しなかった。エカテリーナの剣を甘んじて受け入れたかのごとく、無駄な抵抗は一切せずに、身体を斬られて息絶えた。この時、飛び散った体液の一部がエカテリーナの頬に付着したのだが、これが後に悪夢をもたらすことになる。

ダエーワ教団を殲滅し、バールミリアムを征伐したエカテリーナが事後処理を終えて国に帰還したのはそれから一ヶ月後のことであった。

凱旋したエカテリーナを、国民は歓呼と祝福でもって迎え、彼女を英雄として讃えた。だが、この時、幾人かの国民がエカテリーナの身体に起きていた変化に気がついた。エカテリーナの腹が、ほんの少しだけ、膨らんで

いるように見えたのである。そして、顔色もどことなく悪いように見えた。

宮殿に戻ったエカテリーナは、出迎えた家臣たちに体調を崩していることを伝えると、自室にこもり、内側から鍵をかけた。

そして、これより、悪夢が彼女に牙を剥く・・・・・。

続きは本編にて。